

『迷路』の位置

田 辺 健 二

本多秋五氏は、最近しばしば有島武郎は私にとってまだよくわからぬ作家だ^(注1)と言っている。一方、山田昭夫氏は^(注2)、有島の作品には評価の定まらぬものが多いけれども、『迷路』はその最たる作品である。Vと述べている。^(注3)△よくわからぬ作家Vの、最も^(注4)評価の定まらぬV作品、そんな場所に『迷路』は放り出されている。有島に分からなさと、『迷路』の評価の定め難さ、それは勿論別のものではない。一言で言えば、近代日本文学史上の異類ということである。良くも悪くも、有島武郎はそういう作家である。ところで、その有島に分からなさをそのまま作品にしたものが『迷路』であると言つてよいだろう。したがって、『迷路』の解明と、その正しい位置づけとは、有島に分からなさを解く際の、欠かせない一階梯であると思われる。本稿のねらいは、その点を遠望しつつ、有島の作品系列中での『迷路』の位置を確かめようとしたものである。

『迷路』は、芸術的完成度という点から見れば、おそらく失敗作と断じざるを得ない作品であろう。本多秋五氏は次のように述べている。

アメリカ遊学時代の経験をあつかった長篇『迷路』は、日本の普通の小説鑑賞眼からいえば、著にも極にもかからぬ駄作ということになり、ことに終りの三分の一は、逐字的に読むにたえぬ上ずった悪文ということにならう。

〔「白樺」派の文学〕

山田昭夫氏も、この本多発言を受けて、△つまり、普通ならざる鑑賞眼が要求されているのだが、観念小説として読んでも失敗作ではあろう。Vと言っている。その他、この作品に触れている多くの論者が否定的な評価を下している。

では、この作品を失敗作とする論拠はどこにあるのか。諸家の指摘するところを集約すれば、おおよそ次の如くである。

1. 文体の問題。序編と本編における不統一（山田）。上ずった観念性の強い文体（本多）。
2. 主人公の胎児に対する愛情の説得力のなさ（菊池寛・本多・山田）。
3. P夫人の懐妊を虚妄であつたとする設定の不徹底さ（山田）。
4. 大きな観念を孕んだが故の足元の不確かさ（本多）。
5. 主人公の形象化の不十分さ（江田渙・豊島与志雄）。
6. 構成の雑で、平板な点（江口・豊島）。

これらの指摘は、それぞれ正しく『迷路』の欠陥を突いていると思われる。そして、さらに挙げれば、次のような点もそれに加えることができるであろう。

一つは、主人公Aの甘さである。あるいはAを見る作者の甘さと言うべきかもしれない。序編「首途」においては、いかにも蔽しい反省を自らに課しているAが、本編になると一変して安易な自己肯定をする人間に変貌するの

である。PにP夫人との情事を告白する時の態度、自らの才能や性格・容貌を十全なものとする点、懐妊をしたというP夫人に対する態度、Kの批判に十分に応えていない点、すべて然りである。山田氏の指摘した、P夫人の懐妊を虚妄であったとする設定の不徹底さも、Aを決定的な試練に立ち向かわせるのを回避しているという事になるであろう。そういった甘さを持つAが、いかにも深刻に煩悶するために、それがかえって滑稽な感じをすら与えかねないのである。

また、Aのキリスト教からの離脱と、社会主義思想への接近の経緯も、非常に簡略に説明的にしか描かれていない。

総じて、多様な観念的要素を十分に形象化し得なかったということである。豊富な可能性は持ちながらも失敗した作品、という感が強い。

では、『迷路』がそのような失敗作に終った根本的な原因はどこにあったのであろうか。私はそれを作者有島の視点の不安定さに見る。周知のように、この作品は有島のアメリカ留学時代の体験をもとにして作られたものであり、その序編は当時の日記を下敷にしている。『迷路』執筆時の有島は、ベルグソンやエリスの理論を武器にして、自らの精神的革命の時代Vである青春期を客観的に再検討しようとしているのであるが、その視点に十分に徹し得ていないのである。西垣勤氏の研究で明らかのように、^(注6)日記は意識的に改変され、思想も入れ替えられてはいる。しかし、時としてその古い日記の視点がそのまま残ってしまったのである。その二つの視点は、作中の人物に託して言えば、Aの視点とKの視点と言ってもよいであろう。つまり、古い日記の視点はAのそれであり、『迷路』執筆時の視点がKのそれである。未経験で甘いロマンチストであるAに対して、ニヒルな社会主義者Kの眼は、まさしくリアリストのそれである。有島の若き日の分身であるAを、過不足なく

リアルに描き上げるためには、Kの視点を大幅に取り入れる必要があった。それができずに、自らの若き日の視点にのみり込んで行ったところに、この作品の破綻が生まれたと言えよう。それが文体の不統一を招来し、虚構のゆるみを生み、Aの甘さを作り出したのである。

このように、『迷路』は芸術的完成度という点から見ると、きわめて低い評価をしか与え得ないのであるが、勿論この作品を称賛する声もなかったわけではない。有島の他の作品と同じように、文壇的には不評でありながら、一般的には広く迎えられるという図式は、この作品の場合にも見られたようである。山田昭夫氏によれば、『迷路』発表当時、石坂養平氏は、A「迷路」を読んだ時私の愛着は絶頂に達しましたVとまで絶賛している。石坂氏が感じ入ったのは、A自己を堅く守りながら自己の道を切り開かうとしてどんどん進んで行くV青年Aの姿であった。この石坂氏の賛辞は、その当時の一般的な有島愛読者の声でもあったと言えよう。強大な壁や、愚かしいと思われる障害にぶっかきながらも、真摯に生き抜こうとするAの、誠実な魂のおのきと観念の戦いとは、作品の出来不出来を越えて、若い読者の心を打つに違いない。有島の文学が、文壇の、いわば玄人筋には受けなくて、一般の知識青年層に広く迎えられた最大の要因が、そこにあったと思われる。このようなAの生き方は、あたかも近代日本の自我の、迷いに満ちた歩みを象徴していると言ってもよいのではあるまいか。

また、菊池寛も、A主人公の胎児に対する愛情に就ては、自分は何等の理解も持ち得ない。Vという留保条件はつけながらも、A作者の力強い描写は、相不変少しのタルミも見せない。Vとその文体の確かさを高く評価している。^(注7)そして、最近では野島秀勝氏が、A……『迷路』の文体を認めねばならぬのだ。それをバタ臭いといい、感傷的と断定するのは容易だが、かかる断定に

よって日本近代小説のすこやかな生育が歪曲されたことは確かな事実なのである。「暗夜行路」の文体が行きつくところは「山鳩」でしかない。「迷路」の文体は確実に「或る女」を用意しているのである。Vとして、その文体の重要性を強調している。

今一つの肯定論は、前述のように、芸術作品としての「迷路」を八箸にも棒にもかからぬ駄作Vときめつけた本多秋五氏によって提出されている。八それにしても、近代文学の精細な手法のうちに、このように大きな観念の戦いを試みた作家が、有島以前にあったであろうか？と。氏は、同じような意味のことを「座談会大正文学史」の中でも述べ、有島に日本には貴重な観念文学の可能性を見ていることが了解される。

さらに、今一つ私見をつけ加えれば、Kとジュリヤの人物形象にはかなり成功していると言えよう。どの人物も十分には形象化されていないこの作品の中において、この二人の人物のイメージは相当にあざやかなものがある。

Kには「星座」のガンベに通じる不敵なりアリストの面影があるし、ジュリヤには「或る女」の葉子を彷彿させる娼婦型の女の面影がある。

このように見てくるとき、芸術的にはほとんど破綻している「迷路」が、近代日本文学史上、きわめて重要な問題を孕んだ試みであったことが分かる。その試みをいかに正しく掘り起こし、育成していくかが、我々の課題であろう。

そこで次には、「迷路」の世界に踏み込んで、それが有島の作品系列中でのどのような位置を占めているかを考えてみたい。

管見によれば、今日までのところ、有島の作品系列中における「迷路」の位置づけを試みたのは、本多秋五氏ただ一人である。

「卑怯者」に、もし翼をたたんだ姿勢における作者が見られるとすれば、「迷路」には、飛翔状態にある作者の姿がみられる。

「卑怯者」と「迷路」と——この二つの作品をつなぐ線は、有島武郎の文学という楕円のもっとも長い直径のように思われる。

(「白樺」派の文学)

大筋の方向としては首肯できる意見であるけれども、「卑怯者」を「迷路」と並置する点は納得できない。本多氏はこの論の前の章で次のように述べている。

作者の人柄とは、翼を収めた鳥に似たものではあるまいか？ 静止した鳥の姿だけからは、豊んだ翼をいっばいに拡げとぶ、その鳥の全飛翔能力を察知するのが困難であり、ましてその鳥が現実にとのうな地帯を飛翔圏内に収めているかは見きわめがたいように、ある作家の人柄だけからは、彼の創作の全貌を察知しえないのがむしろ本当なのではあるまいか？

これに従えば、「卑怯者」は作者有島の人柄を最もよく示す作品、「迷路」は有島の八創作の全貌を察知Vできる作品、ということになるであろう。たしかに、本多氏の言うように八僕等の周囲には走禽類的な作家があまりに多いVし、八有島にあっては人柄から作品の全幅的なひろがり予測されえないという事実Vはある。しかしながら、「卑怯者」は有島の人柄の単なる一面——卑怯者意識を描いた作品にすぎない。そういう小品と多様な問題を孕む長編「迷路」とを結びつけて、それを直径とする楕円の中に有島の作品のすべてを収めることができる、とするのはいかにも安定が悪い感じである。

私は、むしろ「迷路」一編だけで、有島文学の楕円を描くことが可能なのではないか、と言うよりも、有島文学のすべてはここから流れ出る、つまり、

有島文学の原点がここにあると考えるのである。「卑怯者」も当然そこから流れ出ている。

そこで、次に、いくつかの項目によりながら、「迷路」の原点である所以を考えてみようと思う。

第一は、二元論的思考の問題である。これは『迷路』の基調をなす思考パターンである。キリスト教という絶対を失なったAの眼には、すべての物事は二元に分裂して見える。その迷路に似た世界をAは絶対を求めて彷徨する。しかも、彷徨するAの主体までが二元に——ベルグソンのいわゆる外的自我と内的自我・純粋持続とに——分裂している。まさに二元地獄とも言うべき迷路世界である。

有島武郎の思想と文学を語る際に、その特質として二元的相剋を挙げるのは、すでに常識に属すると言ってよい。札幌農学校時代にキリスト教に接して以来、それは彼の体質にまでなった。いや彼自身の言葉によれば、それは、父による南方の血と、母による北方の血を受け継いで以来のことであった。彼の文学的出発が『白樺』に発表した「二つの道」によってなされたのも、きわめて象徴的である。彼の生涯の軌跡は、この二元的相剋からの脱却を目指して、ほとんど血まみれの闘いを闘った者の苦悩の記録であった。

『迷路』は、有島のアメリカ留学時代の内的経験をもとにして書かれた自伝的な作品である。彼にとってこの留学時代は、その時までの彼の精神的支柱を形造ったキリスト教から離れて、二元相剋の只中にさまよい出た、自ら言うように「精神的革命の時代」であった。その「精神的革命」の実態を検証し、形象化しようとした作品であれば、有島における二元的相剋のさまが、最も生の形で表われているのは異とするに足りない。

『迷路』の世界は、大きく分けて二つの世界から成っている。仮りに、一つを思想の世界と名付けるならば、他は愛の世界と言うことができよう。この二つの世界は、かなり截然と区分されている。この点からすでに二元論的ではある。そして、このありようは「宣言」の世界に酷似している。

思想の世界においては、自由論と決定論、ロマンチズムとリアリズム、キリスト教と社会主義などの二元相剋がある。

自由論と決定論の対立のさまは、Aの日記に次のように記されている。

自由論と決定論とは僕に取つて単なる知的遊戯ではない。それは僕の二元的な性格の根柢から湧き出て来る嚴肅な問題だ。自分の心を見詰めると、そこには意志の絶対自由がある。即ち無限の自己責任がある。自分はこの誇りから一歩でも退くのを屑しとしない。けれども現象の種々相を見渡すと、そこには宿命の鉄鎖がある。即ち嚴確な運命の統流がある。(中略)統一された純一な生活が欲しい。この葛藤に悩まされながら、パンを口に運ぶのは苦しい事だ。僕はスコット博士の宿命説に極力反対してゐる。それは然し僕の小さな策略に過ぎない。僕の心に確信があるからではない。僕は口では反対しながら、如何かすると心の中で両手を挙げて賛成してゐる。(「首途」八月三十一日の項。漢字の旧字体は新字体に改めた。以下もこれにならう。)

スコット博士は、ある監督教会の若い牧師から、カルヴィンを思わせるような低い声で諄々と予定説を説かれて以来、「貴様はカインと一緒に永遠に呪はれた靈魂だぞ」という悪魔の声に脅かされるようになり、狂癪病院の患者となつてゐる人物である。このスコット博士は、自己本位に生きる決意をし、自由論を信奉しようとするAの足元を揺がそうとする存在である。Aの言う自由論は、自由に行動するということは、自己を取り戻すことである。

純粹の持続のうちに自己を置き返すことである。Vというベルグソンの自由論に近いものであると言ってよいであろう。そして、それは、ベルグソンによって二元相刻からの脱却の理論的支えを与えられた有島の自由論に外ならない。この留学時代、有島はベルグソンの自由の大きな体現者ホイットマンに邂逅している。外界の一切の権威にとらわれない、反逆的自由人・ロー

ファーとしてのホイットマンの生き方は、キリスト教的倫理に足がらみになつていた有島にとって、まさに渴仰の対象であつた。ホイットマンによつて一元的生への目標を与えられ、ベルグソンによつてその理論的裏付けを与えられたのである。しかし、それがただちに問題の解決にならなかつたのは事実が示す通りである。キリスト教的倫理あるいは宿命論と、ローファーの自由との間に引き裂かれながら、というよりも、その二元相刻をむしろエネルギー源としながら、有島は生の歩みを続けたのである。したがつて、この自由論と決定論の相刻は、有島における二元相刻の中核的問題である。後に項を改めて触れる予定であるが、『迷路』に見られる、本能や生命力に対する賛美・信仰は自由論の立場から出てくるものであるし、人生とは畢竟運命の玩具箱だVと嘆ずる虚無的な眼は、宿命論に足を奪われたAのものである。このキリスト教的倫理・宿命論とローファーの自由との相刻をテーマにした作品が『或る女』であつた。『かんかん虫』や『カインの末裔』にも、多分にその要素が見られる。

ロマンチズムとリアリズム。本多秋五氏は、有島文学におけるこの二つの要素に触れて次のように述べている。

処女作『かんかん虫』から『星座』にいたる有島の作品が、リアリティックでありながら、しかも底にロマンティシズムの流れを湛えているという事は矛盾でもなんでもない。対象の執拗緻密な追及の背後に、

ある観念的な構成力が見え隠れしていることも、有島が本格的なリアリストであつたことを証明する以外のなものでもない。ロマンティシズムの大きな観念の昂揚なしには大きなリアリズムはありえない。牙のあるリアリズムは、いつもロマンティシズムか、その生々しい挫折かに支えられていた。

(『白樺』派の文学)

近代日本文学におけるリアリズムの最高の達成であると言われる『或る女』にしろ、北海道の自然と野性人広岡仁右衛門を厳密なリアリズムの手法で描き出した『カインの末裔』にしろ、その底にはロマンチズムの水脈が豊かに流れている。有島自身、「生活と文学」の中で、文学の内在的傾向として、センチメンタリズム・ロマンチズム、そしてリアリズムをあげ、最上の文学的作品を生み出すに適した傾向Vはリアリズムを基調とする傾向Vであることを強調して、さらに、リアリズムの病弊となり易い形式化や平凡化Vを救うものとして、A一味ロマンティックな内容更新の氣勢Vの存在を指摘している。こうした有島の文学観に徴してみれば、本多氏の指摘する有島文学の特色は決して偶然のものでないことが分かる。

『迷路』においても、この特色はきわめて重要な要素として存在している。ただこの作品の場合、前述の成功した作品のように、両傾向が渾然一体となつてはいない。『迷路』において、この両傾向を人物形象に即して言えば、AとK、フロラとジュリヤの対照に見ることが出来る。キリスト教を離れて、新しい人生の指針を求めて彷徨するAの姿は、いささか観念的な甘さを持ちながら、若々しい青春のロマンチズムに溢れている。そして、冥想的な聖処女フロラは、Aにとっては、ロマンチックな憧憬の象徴の如き存在として、はるかの彼方に輝いている。それに対して、ニヒルな影を持つ社会主義者Kは、現実の裏表を知り尽くしたようなリアリストである。また、無意識のこ

ケットリイを持つジュリヤも、リアリスチックな女性のイメージをもって描かれている。ただ問題は、この作品がロマンチズムを主な色調としながら、それを担う人物であるAとフロラの形象化に十分成功していない点と、ロマンチズムの甘さを引き締めるべきリアリストのKとジュリヤが、わずかな点描としてしか登場してこない点にある。先に、この作品の失敗作に終わった根本的な原因として、Kの視点を多く取り入れることなく、Aの視点の中にもり込んでいった点を指摘したが、それがこの問題に係わって来ると思われる。本来有島はロマンチックな傾向の強い作家であり、しかも『迷路』においては、主人公を自分自身をモデルとして描いたせいもあって、十分に突き放してリアリスチックに形象化することができなかったものと思われる。ともあれ、有島文学の一特色である、ロマンチズムとリアリズムの融合は、『迷路』においても不満足ながら重要な要素として存在している。

キリスト教と社会主義。この二つの思想の対立も、有島にとって重要なテーマの一つであった。青年期の精神的支柱であったキリスト教を棄てて、新しい絶対を求めていた有島に同じような力をもって働きかけてきたのが、ホイットマンによるローファー思想と、金子喜一による社会主義思想であった。そして、前述したように、有島の志向はベルグソン哲学に理論的裏付けを得ることによってローファー思想の方へ、さらにはその延長線上の無政府主義思想の方へ傾斜していくことになる。この経緯は『迷路』にも描かれている。キリスト教思想を代表する人物がスコット博士であれば、社会主義思想を代表する人物は、金子喜一をモデルとするKである。そして、Aがキリスト教から離れていく様が、スコット博士の自殺によって象徴されているとすれば、社会主義思想にも入って行けない様が、Kの死によって象徴されていると言えるだろう。有島自身が社会主義に同化できなかった原因は、にわかには断

定しがたいが、一つには、彼が共鳴を感じていたローファー思想や無政府主義思想からの影響が考えられる。しかし、『迷路』ではその点は描かれていない。AがKに同化できないのは、Kの裏表のある言動や粗野な点、あるいは女性関係のだらしないさに対する清教徒的倫理感からの反発が大きな原因になっている。が、それだけでなく、Aの言葉の中に煽動者の常用する空虚な表現のある事を直感し、A主義の腰弁になってしまったVに對する批判も見られる。こういう点には、当時の革命運動家に対する有島特有の『宣言一つ』にも通じる——批判が影を落していると思われる。

以上は、『迷路』の思想の世界における二元論的思考のパターンを見てきたのだが、次には、今一つの世界におけるそれに触れなくてはならない。

愛の世界における二元相剋は、霊と肉のそれである。この霊肉の相剋こそは、有島にとって二元相剋の原点に外ならない。彼自身、「『聖書』の権威」の中でA人には、性の要求と生の疑問とに圧倒される荷を負はされる青年と云ふ時期があります。私の心の中では聖書と性欲とが激しい争闘をしました。Vと言っているように、この相剋は、札幌農学校時代にキリスト教に接した時以来、彼の青春のすべてを暗く閉じた煩悶の最大のものであった。それがために、森本厚吉と自殺行に出掛けたことはよく知られていることである。

『迷路』執筆当時の有島は、すでに教会からも脱会しており、ベルグソン哲学も受容していて、この問題は解決済みであったのだが、自らの青春期を描く上は、絶対に触れなければならないものであった。

『迷路』における霊肉の相剋は、Aの前に現われる二人の女性、フロラとP夫人によって形象化されている。フロラについては先に触れたように、冥想的な聖処女で、Aにとって憧憬の象徴の如き存在である。そして、P夫人は、お互に憎しみ合いながら、ただ単に肉的欲求のためにAと結びついてい

る女である。言うならば、フロラは霊の女であり、P夫人は肉の女である。

このあたり、かなり図式的だが、そういう設定である。このフロラは、いわば有島のベアトリーチェとも言うべき存在であって、『宣言』のY子、『星座』のおぬい、『クララの出家』のクララ、『フランセスの顔』のファニーなどにその類似のイメージを求めることができる。そしてP夫人は、オートー・ワインゲルのいわゆる娼婦型の女であって、『サムソンとデリラ』のデリラ、『老船長の幻覚』の医者の娘、『石にひしがれた雑草』のM子、『或る女』の葉子、『星座』の新井田夫人などに近い存在である。Aは始めP夫人との肉の関係に浸っていたが、後にはフロラを自己の理想的半身として自覚するという具合に物語の筋は展開する。Aにそういう自覚を促したのは、二人のリアリスト、Kとジュリヤである。KはP夫人の懐妊が虚妄であったことを知らせることによって、ジュリヤはAの求愛をAあなたは東洋の方ですよ。よござんすか。Vと手厳しく拒絶することによって、この作品で、作者は肉に対する霊の勝利を歌っているように思われるが、肝腎のフロラとP夫人が不十分な形象に終っているために説得力に欠ける。

以上見てきたように、自由論と決定論、ロマンチズムとリアリズム、キリスト教と社会主義、霊と肉などの二元論的対立は、『迷路』の基調をなしている。そして、それらのいずれの問題も有島の思想と文学の基本的テーマをなすものであることは言うまでもない。

第二は、本能的いしは生命力に対する興味・信仰である。この要素は、『迷路』の竜骨の役割を担っている。作品全編を貫いてこれを支えているものである。『迷路』におけるそのような力の発現は、たとえば次の如くである。

僕の心の底には程々にしておく事の出来ない一つの力が潜んでゐる。

僕はその力を欺きおぼす事が出来ない。(「首途」八月二十三日の項)

……信仰の生活も、二箇月の狂癪病院の生活の間に綺麗に崩してしまつた。何んにもなかつた。何んにもなかつた。唯自由と若さだけがあつた。だから、彼は小児のやうに快活で無頓着であらねばならなかつた。

然し事實は反対だつた。彼に与へられた命力は働きかける対象を失つたために、彼の肉体の中で、たうちまはつて苦しんだ。その力は色と形とを失つた暗い渾沌に還つた。謂はゞ飽電しながら、それを発散する機縁を失つた黒雲のやうに、力強い非形が彼の心に満ち／＼てゐた。我れながらその虚無の力を彼はあつかひあぐんだ。(「迷路」一)

Aの心の底に蟠るA飽電しながら、それを発散する機縁を失つた黒雲のやうなV力強い非形Vの命力、それこそが、Aを駆って迷路世界を彷徨せしめる根源的なエネルギーに外ならない。その力は、あるときは信仰に、あるときは肉欲に、あるときは社会主義に、そしてあるときは愛に向かつてAを突き動かす。あたかもそれは、ふさわしい出口を求めて噴出しようとする地中のマグマさながらである。Aがくり返しつつぶやく「静かに静かに」というリフレインは、この噴出せんとする生命力をからくも制御しようとする理性の困惑の声である。青春のこの横溢する生命力が『迷路』全編を貫いて、これを支えている。『迷路』を統一する力はこれである。先に述べた様々な二元相剋も、後に挙げるいくつかの要素も、すべてこの力によって収斂させられてゐる。

この生命力は、有島が後年『惜しみなく愛は奪ふ』において、A本能Vと呼び、A愛Vと呼んだものに重なる概念である。A本能とは大自然の持つてゐる意志を指すものVであり、A人間によつて切り取られた本能——それを

人は一般に愛と呼ぶといふのである。この本能の力についてさらに明確に
触れた文章が、「生活と文学」の中にある。

凡ての力はそれが善くあらうとも悪くあらうとも、必ず破壊の力を伴
つて居ます。もつと正当にいふと力には悪い力はありません。其の力が
その奥底から純粹に湧き出した場合には、必ず破壊すべきものを破壊し
(それが現在に於て一見どれ程尊いものに見えようとも)、築き上げべ
きものを築き上げて行きます。人間の生活の凡ての現はれが力の働きで
ある以上、文学も亦一つの敵しい力です。その破壊力を恐れて、最も尊
いものゝ隠されて居るのを忘れるのは、不幸だといはねばなりません。

生命の力・本能の力をこのようなものとして把握するとき、それが有島の
代表作のすべてに奔騰せんばかりに溢れていることに気付くのである。『或
る女』や『カインの末裔』『サムソンとデリラ』『生れ出づる悩み』などは
言うまでもなく、『かんかん虫』『老船長の幻覚』『宣言』『石にひしがれ
た雑草』『星座』などにも、それは色濃く表われている。さらに、一見それ
らとは対照的な作品のように思われる『クララの出家』も、本多秋五氏の言
う如く、その力を描いたものに外ならないのである。試みに、『カインの末
裔』についての有島自身の言葉を聞いてみれば、彼の考えた力がどのような
ものであったか、さらに判然となるであろう。

私はあの作のうちに、人間の己むに己まれぬ生に対する執着の姿を見
て貰ひたいと思ふ。それが人に与へられたどういふ運命であれ、悪い運
命であれ、人は生に対する不思議な我執をもつてある。それが然し乍ら
私達の力であらねばならぬ。その力を私達の凡ての生活の現はれに於て、
徹底的に考へて見るべきではあるまいか。(「自己を描出したに外なら

ない『カインの末裔』)

『迷路』のみならず、有島文学の根幹を貫く最大のものは、まさしくこの
生命力・本能に対する並々な興味・信仰であると言えよう。このような
本能信仰は、言うまでもなく、ベルゲンソン・ニーチェらの「生の哲学」の有
島なりの受容に裏打ちされたものである。

第三は、虚無の眼である。第二の要素として、生命力・本能信仰を指摘し
たが、それと一見矛盾する要素としてこれがある。勿論、前者が作品全体を
貫くものである程には、これは多く描かれてはいない。しかし、主人公Aの
人物形象、『迷路』の作品構造の上で、これが欠かせない要素であることは
確かである。若い、健康なAにおいて、生命力の横溢はむしろ当然のことと
あるが、そのAが時としてこの虚無の陥穽に足をとられることがある。それ
を明瞭に表現しているのは次の三個所である。

一つは、「首途」において、Aが、宿命論にとらわれているスコット博士
から告白を聞いた後の記事である。

眼の前には果てしもない暗黒が峭壁のやうに果てしもなく連つてゐる。
後ろには底無しの深淵が音も立てずに凝然と凝んでゐる。僕は力を尽し
て自分の周囲から暗黒を追ひ退けようとしてゐるのだ。僕は一人で、僕
一人の力でそれを押しもどして行かなければならない。然し暗黒は動も
すれば却つて僕を吞まうと迫つて来る。(八月二十四日の項)

二つめは、AがKから離れて田舎の地主の農場で働くようになってから、
P夫人の胎児を空想して煩悶する場面である。

いかに彼自身の生活がよく生活されて、氣息を引き取る枕の上で、勝
利を叫ぶ事が出来たとしても、若しP夫人の生んだその子の一生が不幸
で封印されたものだったら、彼の生活は畢竟何んだ。彼が生み出した生

活は畢竟何んだ。さう思ふと彼の眼の前で人生は墨のやうに暗くなつた。若い彼の心が夢想して築き上げようと努力してゐる人生は、有つても無いも同様な蜃気楼に過ぎないのだ。人生とは畢竟運命の玩具箱だ。人間とはその玩具箱に投げ込まれた人形だ。箱の中で人形が頭を上を足を下にして順当らしく立つてゐたとした所が、それは逆立ちをしたり、ぶつ倒れたりしてゐる人形があると同様に偶然な事だ。(『迷路』一六)

そして今一つは、『迷路』終末部、Kの死を一人看取つたAが暁闇の中で抱く感慨を述べた部分である。

「この総てのもの、空しさはどうだ」

Kの棺の前の窓框に腰かけてゐたAは、夜の空を見上げながら不図かう独語らた。

今朝の今朝まで、彼の頭を一杯に領してゐた大きな問題——P夫人の胎に宿つた嬰兒——は、Kの一言の爲めに、今は煙よりも果敢なく跡形もなくなつてしまつた。(中略) 理屈から言ふと、KがP夫人の近況を語つて聞かせた時、彼は思はず愁ひの眉を開くべき筈だつた。実際そんな心持は十分彼の胸に湧き起つてゐた。それにも拘はらず、そんな心持までを押包んでどす黒い空虚が彼を戦かした。総ては一場の悪夢に過ぎなかつたと喜びもしよう。然しこの悪夢を生んだ人間の心はどうだ。それは何んといふ暗い姿だ、P夫人と云ひ、彼自身と云ひ。(中略)

今彼の心からも体からも、総てのものは残りなく去つてしまつてゐた。彼にはP夫人の事を思ひ煩ふ必要もない。Kは又Kで死んでしまつてゐた。空しい憂鬱と厭世の心が古沼のやうに熱も光もなく濃んでゐるばかりだつた。(『迷路』一九)

栄光への明るい希望と、虚無への暗い絶望、この二極の間を振り子のように

揺れ動くのは、青春一般の特性であらう。Aもまたそのような青春を生きてゐる。Kにしたたか嘲弄された後でも、A然し彼は確かに打負かされたとは思はなかつた。彼は雪に埋もれた笹のやうに自分を感じた。雪はいつか解ける。その時笹は跳ね起きてみせる。春を迎へてぐんぐん生長するために跳ね起きて見せる。Vと、自らの若い力を誇り得たAも、たちまちこのような虚無の思いにとりつかれてゐる。Aにおけるこのような虚無の思いは、先述したやうに、スコット博士に代表される宿命論に足を奪われた時に、Aを襲つてゐる。A眼の前には果てしない暗黒V、A後ろには底なしの深淵Vを見、A人生とは畢竟運命の玩具箱だVと観じるA、人間の営みのAこの総てのもの、空しさVに想到したAの青春は、この上なく暗い。こういう暗さを描いた作家は、『白樺』派の中には有島より外にない。『白樺』派主流の明るさは影のない明るさである。病んだことのない健康さである。有島もたしかに、明るさを持ち健全性を持つてはゐる。しかしながら、それは背後に深い影を背負つた明るさであり健全性であった。虚無の暗闇を通り抜けてこそ、実在の明るさを真に認識できるものであるとすれば、有島は、そして『迷路』の主人公Aは、たしかにその認識のとは口に立っている。

『迷路』は題名が示す通り元より迷ひの表現です。然し迷ひであるが故に悪であるとは思ひません。その迷ひ方に善悪があるのだと思ひます。そして私の目ざしたいのはあの迷ひの中に現代青年のよき迷ひを描かうとした事です。あの時代を通らなければ新しい肯定の時代は生れないと思つたのです。(『スネーク』所載の文章。鎌田研一氏による。)

このやうな暗い虚無の眼は、『迷路』以前の有島の作品にはほとんど見られないものである。だが、それ以後の作品では、それは次第に多く現われて

くる。たとえばそれは、『或る女』の中で、病み疲れた葉子が△燃えるやうな青空の中▽の△あからさまな景色を夢かなぞののやうに眺め続けてゐた▽眼に典型的に示されている。野島秀勝氏は、これを△末期の眼▽と言つた。^(注8)そして、『石にひしがれた雑草』『運命の訴え』を経て、有島の死の年の作品『酒狂』『或る施療患者』『骨』になると、それはもう全編を蓋い尽すものになつてゐる。特に『詩への逸脱』を宣言した有島の詩、「瞳なき眼」は、それを恐ろしいまでの象徴として表現している。

あからさまに云はう、

大千世界は瞳のない眼だ。

見開いたまゝ瞬きをしない眼だ。

劫初から劫末へ、

ギヤマンの皿にすかして見る鳥賊の皮膚の色のやうな白眼だけが。

凝然として、動かずに、流れずに。

(後略)

『迷路』においては、この虚無の眼はまだ部分的にしか現われてこない。奔騰する青春の生命力がそれを圧倒しているからである。しかし、以後この二つの要素は有島文学の中で絶えざるせめぎ合いを続け、ついには逆転して、虚無の眼が他を圧倒し去ってしまう。そこに有島の死があった。

第四、男女の争闘。これは、有島自身が『或る女』のテーマとして取り上げたと述べている周知の問題である。歴史的社会的な原因のため男女は互に仇敵の間柄になりながらも、本能として愛し合はざるを得ない。この矛盾から種々の悲劇は生まれるというのである。『迷路』においては、この要素はAとP夫人との関係に取り入れられている。この場合、『或る女』における

葉子と倉地との関係のように本格的には追及されていないけれども、やはり見過ごすことのできない問題である。AとP夫人は始めから愛し合つてはいない。ただ肉欲のためにだけ結び付いてゐるという関係である。

撲き殺してくれたい程P夫人を憎んでゐる癖に……夫人との関係を汚れ切つたもんだと思つてゐる癖に……僕は矢張りどんな風にか夫人に執着を持つてゐるんだ。……僕はその結果を……結果を命にかへても怒しまないではゐられないんだ。(『迷路』一一)

二人の関係について、AがKに話している個所である。憎みながら執着を断ち切ることができない、というAの煩悶は、有島の考える△男女の争闘▽そのままである。あまりにも簡單明瞭に答えが出てしまつてゐる感じで、これ以上の論及はできそうにもない。ただ、これに関連して、一つだけ触れておきたいことがある。それは、従来『迷路』の謎とされてゐる胎児幻想の問題である。AがP夫人の胎児(幻想の)に対して抱く、常識的には考えられない程の愛着は、作品発表当時から、ほとんどすべての論者によつて不可解とされてゐる。たしかに不可解である。父性愛というものが、そういう形で発現するとは私にも納得がいかない。しかし、だからと言って、これを、△父性愛とか、肉親の愛情とかいうものではない▽△純粹に倫理的な責任感である。▽ (本多秋五)、△Aは父性愛と責任感とを混同してゐるのである。▽ (山田昭夫) というふうには、簡単に置き替へてはならないだろう。有島は書簡の中で次のように言つてゐる。

始めは窮状から理的に一種の義務観念で胎児の愛を要求しても、胎児が世に出て来るのが近づくところを親として本能的な要求、即ち愛が激しく働き出すと思ふのだ。然し僕の場合では其経路が恐らく十分に説明されてゐないのだらう。(足助素一宛・一九一八・一・一五)

そして、作中のAもこれとほとんど同じことを考えている。

彼のたゞ一つの望みは夫人の生むべき子に父親の愛を感じたい事だった。この動物的な本能は、寂しい彼の心を遮二無二ひつ捕へて離れやうとはしなかった。（『迷路』一〇）

「如何なる父も私以上には強く愛しなかった。愛する所に権利がある。さうだ。愛のある所に権利がある。私はこの権利によつてあなたに訴へる。子は私に返せ」（『迷路』一五）

我々はやはり、有島の意図や、Aの考えを尊重しなければならぬだろう。すなわち、Aの胎児への執着は父性愛であると。たとえそれがいかに不可解であろうとも、それはそのままに理解されなければならない。そこに、有島の特異性があるのだから。勿論、作品の評価の問題はこれとはまた別のものである。このような父性愛も、「生の哲学」の影響による本能信仰の一つであろうか。あるいは、『迷路』と同年に発表された『小さき者へ』に吐露されている、△何しろお前たちは見るに痛ましい人生の芽生えだ。泣くにつけ、笑ふにつけ、面白がるにつけ、淋しがるにつけ、お前たちを見守る父の心は痛ましく傷つく。▽という、有島自身の、母を失った子供達に寄せる胸のうづくような愛情の、それは反映でもあつたらうか。

ただ、このような形の父性愛を描いたものは、有島の作品の中でこれ以外には見当らない。

このほかの要素として、労働者に対する共感や、偽善者意識・臆病者意識などを挙げる事ができるが、『迷路』の場合、さして重要な要素とはなっていないので、ここでは取り上げないでおく。

以上のように見てくるとき、『迷路』には、有島武郎の思想と文学におけ

る、重要なテーマ・問題がほとんどすべて出揃っているといえよう。勿論、それらが十分に形象化され、高い芸術的完成度に達しているとは言い難いけれども。原点というものが、暗い渾沌たる非形のものであるとすれば、『迷路』はまさしく有島文学の原点と言うにふさわしい作品である。

（昭四六・三・一〇）

（注）

1. 「『白樺』派の作家と作品」 末来社
2. 『有島武郎』 明治書院
3. 4. 5. 山田昭夫氏の前掲書による。
6. 「有島武郎覚え書——信仰離反の時期をめぐって——」 昭38・10 『日本文学』
7. 鍵田研一氏『有島武郎創作全集』第二巻解説による。
8. 「人道主義の振幅——有島武郎論——」 昭40・1~2 『文学界』
9. 日記 一九一六・七・二
10. 『時間と自由』 岩波文庫本220頁